

ジュリアン・グリーン作品における

手紙について（2）

井上三朗

目次

1. 問題提起
2. 告白のためらい、または不可能な告白
3. 発送（投函）されない手紙
 - (1) 『モン・シネール』
 - (2) 『ヴァルーナ』
 - (3) 『南部』
 - (4) 『モイラ』
 - (5) 『他者』
4. 『悪人』の問題
5. 結び

（太字は今回掲載分）¹⁹⁾

3. 発送（投函）されない手紙

前章において、『漂流物』および『アドリエヌ・ムジュラ』の中の手紙を検討した。この検討の過程で、発送（投函）されない手紙がみいだされた。『アドリエヌ・ムジュラ』において、ヒロインが作成した一通目の手紙は、宿屋の食堂にあったメニューの紙からなるもので、投函されない。『漂流物』では、エリアヌが実際の手紙の執筆に先立って、「心のなかでフィリップに愛の手紙を書い」ている（Ⅱ-4, p.77）。この〈夢見られた手紙〉もまた、発送されない手紙の一種とみなすことができる。また、はじめに取りあげた『人みな夜にあって』においては、主人公ウィルフレッドが、愛の手紙と「穏やかな手紙」とを作成し、両方の手紙を投函するまえ、フィービーへの愛の欲望に責めさいなまれて、「人が発送することのないあの狂おしい手紙の一通」をしたた

めている（Ⅱ-32, p. 608）。このような発送（投函）されない手紙は、グリーンの他の作品でも数多く存在する。発表された年代順に列挙すれば、『モン・シネール』『ヴァルーナ』『モイラ』『南部』『他者』といった作品にみいだされる。そこで今度は、この発送（投函）されない手紙を分析と考察の対象とすることにしたい。

（1）『モン・シネール』

まず、『モン・シネール』（1926）の中の手紙をみてみることにしよう。この第一作目の長篇小説は、十九世紀末のアメリカの都市ワシントンの郊外にある、モン・シネールという館を舞台にし、この館に住む一家族の確執をえがいている。その家族とは、十五歳の女主人公エミリー、母親のフレッチャー夫人、祖母のエリオット夫人である。エリオット夫人は息子（フレッチャー夫人の兄）と暮らしていたけれども、1880年の息子の死去によって、娘を頼ってモン・シネールの館にやってきた。また、この館は、フレッチャー夫人の夫ステファンが勤め先の輸出商社をやめて隠居生活に入るときに購入したものである。しかし1879年にステファンが他界し、以後フレッチャー夫人が館内の実権をにぎるようになった。フレッチャー夫人は極端な儉約家で、吝嗇をひとつの情念のように生きる人物である。たとえば、冬のさなかでも暖炉にくべる薪を節約し、娘や母につらい思いをさせるのだ。フレッチャー夫人が耐乏生活を強いることで、肉親間の絆はこわれる。エリオット夫人はフレッチャー夫人を憎悪し、エミリーは敵愾心を燃やし、母親にかわってモン・シネールを支配したいという夢をつのらせる。こうした中で、エミリーは手紙を書くにいたるのである。

エミリーの手紙は第十七章²⁰⁾においてみいだされる。母親フレッチャー夫人の支配に堪えかねていたある日、エミリーは、母がトランクを持って外出するのを目撃する。母が金目のものを売り払いに行ったのだと思ったエミリーは、母の部屋の中に忍び込んで持ち物を点検する。そして母の聖書に、母の若い頃の友達であるグレース・ファーガスンという名の女性の手紙がはさまれているのを発見する。このことがきっかけとなって、エミリーはその日の夕食後、手紙を作成する。グレースという名前をかりて、自分あての手紙を書くのである。想像上の発信人であるグレースはこの手紙のなかで、父親の支配のもとで生きることの苦しみをうったえている。

「その気になれば、わたしが髪につけているリボンの飾り結びまで、父が取りあげてしまうことを、いったい誰がふせげるでしょうか？ わたしは何も所有していません。何も、何も。父がわたしたちの家具を売り払い、家具を斧でこ

わし、家に火をつける気になったとしても、そんな権利はないと、いったい誰が
あえて父に言えるでしょうか？ 父はすべての財産の唯一の所有者であり、父だ
けが好き勝手に処分することができるのです」(p. 155)。

エミリーは架空の発信人グレースに仮託して、家庭内での実権を母親に握ら
れていることの憤懣をぶちまけている。「わたしは何も所有していませんの
です。何も、何も」(Je n'ai rien, rien, rien.) という文は、「何も」(rien) という語の
反復によって、その無念さを鮮明に表現している。このような手紙を書いたあ
と、エミリーはこんどはグレースを架空の受信人にして返事を書く。この返事
のなかでエミリーは、こう言っている。

「わたしは幸福です。そうです、とても幸福です。わたしは自由なのです。自
由なのです。自由なのです。モン・シネールはわたしのものなのですから(…)」
(17, p. 155)。

ここではエミリーは、自分がモン・シネールの支配者になったと想定して、
便りを作成している。「幸福」(heureuse)あるいは「自由」(libre)という形
容詞の執拗な繰りかえしから、エミリーの強烈な支配欲、あるいはまた所有欲
がみてとれる。

ところで今みた二通の手紙は、グレースという想像上の発信者もしくは受信
者を設定して書かれているのだから、当然のことながら発送されない。また、
これらの手紙は、自分の悩みや願いを打ち明けるべき相手、すなわち con-
fidente (告白の受け手)の不在を証しており、エミリーの孤独性を露わにして
いる。この点にかんして、プレイアード版テキストの註釈者ジャック・プチは
エミリーの手紙を評して、こう論じている。

「書くことは夢を《形あるものにし》、夢に一種の存在感を与える。しかし手
紙が発送されないとき、—ここでのように一文通の相手が架空の人であるとき、
あるいは作中人物が自分自身に宛てて手紙を書くときでも、孤独の印象は強めら
れるのである」²¹⁾。

ジャック・プチは、書くことが夢を具体化するにしても、エミリーの手紙は
実在する特定の人に宛てたものではないだけに、孤独なひとみであることを
指摘している。そしてここでの「孤独の印象」は confidente の不在、換言すれ
ば、告白の不可能性というきびしい事実から生じている。

エミリーは作品第二十四章でも手紙を書いている。そこに至るまでの経緯を
説明しよう。第十九章で、教区の牧師セジウィックが教会への寄附をつるた
めモン・シネールにやってくる。吝嗇なフレッチャー夫人はもちろん牧師の依

頼をことわる。その折、セジウィックはエミリーに、貧しい人びとに尽くすため、奉仕裁縫所 (ouvroir) の仕事を手伝うようにすすめる。エミリーはこの牧師に好意をいだき、奉仕裁縫所に行き、仕事をもらい、家で裁縫をする。さらに牧師の訪問から数日後、牧師に便りを書くのである。

「つづく数日間、エミリーには果てしなく思われた。彼女は、グレンコーの牧師が再びやってくるのを見られるのではないかという期待をいだいて、窓辺で時をすごすのだった。時どき、祖母が眠っている折に、整理机に腰かけ、聖職者に手紙 (des lettres) を書くのだったが、そのあと、聖書のなかにすべり込ませるのでなければ、その手紙をひき裂くのであった」(p. 191)。

エミリーは牧師セジウィックに宛てて、複数の手紙をしたためている。しかしながら、これらの手紙は、実在する名宛人にたいするものであるけれども、ひき裂かれるか、もしくは聖書の中に差し入れられるだけなので、発送 (投函) されない。もっとも、聖書のあいだにはさんだ手紙の一通は、偶然にも牧師の手にわたる。すなわち、エミリーは日曜日、セジウィックの顔を見たいということもあって、これまで赴いたことのなかった教会に出むく。礼拝が終わり、帰ろうとした際、聖書を置き忘れてきたことに気づく。そこで礼拝堂へひき返し、聖書を持っていこうとする。そのとき、教会内を監理するイライザ・ヘスという女性がエミリーを呼びとめる。エミリーが教会の聖書を持ち出そうとしていると思ったからである。しかもその聖書には牧師あての短い手紙がはさまれている。もしその聖書がエミリーのものであれば、手紙は牧師に手渡されてしかるべきなのに、そのままになっていることから、イライザ・ヘスは聖書がエミリーのものでないと確信する。エミリーは牧師のところへ連れて行かれる。結局、疑惑は晴れるが、聖書の中の手紙は牧師あてのものなので、牧師が保管する。かくしてエミリーの手紙のうちの一通だけは牧師セジウィックにとどき、読まれる。しかしこれはエミリーの積極的な意思によるものではなく、偶然の所産にすぎない。それゆえ、セジウィック宛てに書かれた手紙もまた、基本的には発送 (投函) されない手紙だといえる。

エミリーにとって、牧師セジウィックはいかなる存在であるのだろうか。つまるところ、アドリエヌ・ムジュラにとってのモルクール医師がそうであるように、セジウィックはエミリーの前に出現した最初の隣人であり、孤独の解放者となるべき〈他者〉であり、愛の対象となるべき存在であろう。先に引用した一節の中の、「グレンコーの牧師が再びやってくるのを見られるのではないかという期待をいだいて」という箇所は、エミリーの内心で芽ばえた愛の感

情をかいまみせているように思われる。また、日曜日に教会に出むくという行為も、牧師への愛に根ざしているかもしれない。ただ、エミリーじしんは、牧師にたいする好感が愛であることを自覚していない。このため、作品はこのうち牧師との関係の記述に向かわず、もっぱら家庭内の確執の顛末を語ることになる。その後の物語の展開を要約しておこう。祖母のエリオット夫人の死後、母フレッチャー夫人はミス・ゲイという下宿人を家にむかえ、家計を維持しようとする。所有欲・支配欲に燃えるエミリーは、これに対抗して、愛してもいなくつての使用人のフランク・スティーヴンズと結婚することで、母から実権をうばおうとする。結婚後、エミリーは下宿人とともに母をモン・シネールから追い出す。だが、母から奪取された家庭内の権力は夫のフランクに移行するにすぎない²²⁾。モン・シネールを所有するために結婚したのに、権力者が交替したにすぎないことに絶望したエミリーは、館に火を放ち、完璧な孤独のなかで果てる。このような展開からは、愛の徹底した不在が浮かびあがってくる。エミリーの所有欲・支配欲は愛の情熱に転化しうるものであろう。とすれば、愛の対象となるべき〈他者〉としてのセジウィック宛てに書かれた一連の手紙は、先にみたような、架空の発信者・受信者を設定した手紙と同じように、発送（投函）されないがゆえに、エミリーの孤独性を際立たせているし、と同時に、告白の不可能性をも浮き彫りにしているのである。

(2) 『ヴァルナーナ』

次に、『ヴァルナーナ』(1940)の中の手紙を検討することにしよう。手紙がみられるのは、作品第二部の「エレヌ」においてである²³⁾。「エレヌ」は主としてベルトラン・ロンバルの苦悩を物語っている。ベルトラン・ロンバルは妻エレヌを心から愛していた。しかし妻エレヌは娘を出産したとき、不幸にも息をひきとる。以後ベルトラン・ロンバルは悲しみの日々をすごす。そして年月の経過とともに、新たな苦悩を背負いこむ。というのも、娘エレヌが成長するにつれて、亡き妻のエレヌにますます似てくるからだ。ベルトラン・ロンバルは、娘エレヌにたいして近親相姦的な愛情をいさぐ。もしくは、娘エレヌの存在をとおして、死んだ妻への報われぬ愛の情熱にかき乱される。そこでベルトラン・ロンバルは魔術師ウスターシュ・クロシュの力をかりて、娘エレヌを媒介として亡き妻エレヌとの交流をこころみる²⁴⁾。

以上が、『ヴァルナーナ』第二部の「エレヌ」の本筋であるが、「エレヌ」では、ベルトラン・ロンバルのこうした不可能な愛とともに、マルグリットとの不可能な愛もまた、合わせて語られている。マルグリットとは、ベルトラン・

ロンバルの妻となったエレヌの妹である。この姉妹は孤児となって以来、おばのもとで育てられた。マルグリットが十二歳のときに、姉が結婚し、以後、姉の幸福を妬みながら生きる。ところが、姉のエレヌは上述したように、娘を産んだときに不帰の客となったので、マルグリットはベルトラン・ロンバルの館に住み込み、姉にかわって赤ん坊の世話をするとともに、家事をとりしきる。そしてベルトラン・ロンバルに愛情をいだくようになる。この愛ははじめ自覚されない。だがついにマルグリットは己れの愛を悟る。とはいえ、この愛は不可能なたちをとる。ベルトラン・ロンバルは妻をうしなったことでの悲しみにひたりきりであるし、マルグリットじしんは、自分が醜い女であるので、ベルトラン・ロンバルに値いしないと考えているからだ。作中、義理の兄を前にしてのマルグリットの態度は、次のように描写されている。

「愛する人に自分が値いしないと思っていたので、彼女〔マルグリット〕はもう彼の姿を見かけると、すぐさま顔を赤らめないではいられなかった。それに彼に声をかけられれば、罪を犯した人のように口ごもるのであった。しかし彼のほうは、小娘の軽はずみな言動に注意を払わないのと同様に、こうした無意識の愛のあらわれに注意を払っていなかった」(Ⅱ-1, p. 701)。

この一節では、マルグリットがベルトラン・ロンバルにたいしてぎこちない態度をとったこと、また、この態度はマルグリットがいだく愛の証しであるけれども、ベルトラン・ロンバルはマルグリットの気持ちをまったく汲みとろうとしていなかったことが述べられている。こうしてマルグリットは、ベルトラン・ロンバルへの愛の情熱を、いささかも理解されることなく、沈黙と秘密のなかで生きつづける。そしてとうとう、孤独感にうながされて義理の兄への思いを文章化するのである。作中、ベルトラン・ロンバルが妻に先立たれたことの悲しみにくれているため、彼がいかに美貌の持ち主であっても空しいことだと、マルグリットが考えているくだりがある。このくだりのあと、以下のような叙述がつづいている。

「彼女〔マルグリット〕はこうした類いのことをほかにもたくさん考えていた。そして往々にしてそれを文字にするというよろこびに身をゆだねるのだった。というのも彼女は詩人たちの本を読んだことがあり、こうした訓練²⁵⁾をうまくやりおおせられたからである。だが、きっと笑われるにちがいないと思っていたこの紙きれを人に見つけられはしないかとびくびくしていたので、紙きれを呑みこんでしまうのだった。ベルトラン・ロンバルの名前と、その比類なき容姿の燃えるような描写を絶えず繰り返したことばを食べるのは、なんと心地よいことで

あろう！」(I-1, p.702)。

マルグリットが綴っている文章は、ベルトラン・ロンバルへの愛の思いを披瀝し、また、彼の容貌の美しさをほめたたえた詩である。だがこの詩は、ジャック・プチも指摘するように²⁶⁾、同時に手紙でもある。なぜならマルグリットはベルトラン・ロンバルにたいする秘めた思いを語っており、その思いはベルトラン・ロンバル本人に伝達されるべきものであるからだ。しかしマルグリットはこの詩あるいは手紙を呑みこんでいる。したがって、ここでも発送(投函)されない手紙がもんだいなのである。とはいえ、ここでは、マルグリットが書くことに、また、書いた紙きれを食べることによるこびを感じている点が注目される。マルグリットは自らの愛の感情を相手に打ち明けることができないことになら苦しみをおぼえていない。その理由として、自分がベルトラン・ロンバルに値いしない人間だと考えているところからわかるように、マルグリットが自らの愛にたいして希望・期待をいだいていないということが挙げられる。マルグリットは自らの愛の成就をはじめから断念したところで生きてるので、発送しない手紙を書くことやその手紙を食べることにさえ、快感をあげるのである²⁷⁾。これらの行為は、不毛な愛を生きるマルグリットにとって、自己の孤独をまぎらせる気晴らし、慰めであるのだろう。けれどもそれらの行為が、やはり孤独ないとなみであり、マルグリットにおける告白の不可能性をかいま見せていることは打ち消しがたい事実なのである。

(3) 『南部』

このような〈食べられた手紙〉は、劇作『南部』(1953)においてもみいだされる。そこでここでは、『南部』を取りあげることにしよう。『南部』は南北戦争の勃発直前のアメリカ南部を舞台にし²⁸⁾、ポーランド生まれの陸軍中尉イアン・ヴィシエフスキーの、生粋のアメリカ南部の青年エリック・マックルアにたいする宿命的な愛を中心主題としている。だがこの作品では、他の人物たちの愛の情熱もまた描かれている。レジーナのイアン・ヴィシエフスキーにたいする愛、アンジェリーナのエリック・マックルアへの愛、逆にエリック・マックルアのアンジェリーナへの愛などである。そして手紙は、エリック・マックルアとアンジェリーナとのあいだでみられるので、このカップルのみに焦点をあわせることにしたい。

大農場を経営するエドワード・プロデリックの娘アンジェリーナとエリック・マックルアとは、クリスマスの際に出会う。エリックが父親といっしょに夕食に招かれてエドワード・プロデリックの家を訪問したとき、二人は邂逅

する。エリックは、戦争が不可避なものとして間近にせまっているため、愛してはなるまいと自分に言いきかせる²⁹⁾。しかし、にもかかわらず、エリックは一目見てアンジェリーナの美しさに心を打たれ、恋におちいる。その日の夜、エリックはアンジェリーナに愛を告白する夢をみる。だがアンジェリーナは反応しない。それで翌朝、目をさましたあと、抑えがたい告白の衝動にかられて、アンジェリーナに便りを書こうとする。エリックはこの時のことをかえりみて、イアンにこう言っている。

「ぼくは彼女 [アンジェリーナ] に手紙を書きたかった。でも次から次へと手紙を破いてしまった」(Ⅲ-1, p.1073)³⁰⁾。

ここで語られているのは、〈ひき裂かれた手紙〉である。この〈ひき裂かれた手紙〉は『モン・シネール』にも在ったけれども、これが発送(投函)されない手紙に属することは言をまたない。エリックは、これ以後、アンジェリーナに自分の思いを打ち明けることができないまま、苦悶の日々をすごす。それゆえ、この手紙はエリックの孤独性と、彼における告白の不可能性とを開示しているのである。

一方、アンジェリーナのほうも、エリックをはじめて瞥見した瞬間から愛の情熱のとりこになる。出会いの日をふり返って、アンジェリーナは従姉レジーナ³¹⁾に、「あたしはなぜだかわけもわからずに苦しんでいた。いっそのこと死んでしまいたかった」(Ⅰ-5, p.1027)と述懐している。アンジェリーナの苦悩と死の想念は、自己の内心に生じた愛が告白されないと予感したことに起因すると思われる。アンジェリーナはその日の晩、夢遊病者のように外出し、あてもなく彷徨する。それから森の中の空き地にひれ伏し、穴を掘る。

「あたしは指で地面に穴をほじくって、耳のくぼみにささやくように、その穴に何かをささやいたのよ。地面に顔を近づけ、何かをお願いしたの。そのあと穴をふさいだわ」(Ⅰ-5, p.1028)。

アンジェリーナの奇妙なおこないは考察を要する。いったい、アンジェリーナは何をささやき、何をお願いしたのだろうか。おそらく「何か」とは、エリックへの愛にまつわる思いであり、また、エリックへの愛がかなえられることを希求する気持ちと関連しているだろう。では、アンジェリーナはどうしてあけた穴をふさぐのだろうか。この行為は、自らの愛の思い・願いを人目にさらすのではなく、隠蔽するためであると考えられる。したがって、アンジェリーナの一連のふるまいは告白の衝動を前提としつつも、告白の不可能性を示唆しており、この点において、発送(投函)しない手紙を作成することと酷似してい

るのである。

アンジェリーナはエリックとめぐり会った翌日のことを回顧しつつ、レジーナに次のように話している。

「翌日の午後、大農場の付近を散歩していると、黒人の子どもが駆けよってきて、一通の手紙を渡してくれたわ。(…) その手紙を読むために、部屋でひとりっきりになれるまで待ったわ。はじめのうち、よくわからないままに、行から行へ飛ばし読みしたの。そして自分がふるえているのに気がついた。ラヴレターだったのよ。

(…)

あたしはその手紙を手にとり、胸や腕にこすりつけたわ。どんなにうれしかったか想像もつかないでしょうね」(I-5, p.1029)。

アンジェリーナはこう言ったあと、「手紙はどうしたの?」と問うレジーナにたいして、「食べてしまったわ」と答えている(I-5, p.1029)。こうしてアンジェリーナは全体として、エリックと出会った翌日、エリックから愛の手紙がきたこと、そしてその手紙をよろこびのあまり食べてしまったことを語っている。この出来事は、前日の晩、地面に穴を掘って何かをささやき、願ったという行為に呼応している。アンジェリーナの愛の願いは、エリックからのラヴレターがとどいたことで報われたわけである。しかしながら、アンジェリーナはレジーナに明らかに嘘をついている。というのも、先にみたように、エリックは告白の衝動にかられてアンジェリーナ宛てに手紙を書くけれども、その手紙を次々とひき裂き、結局発送していないからである。エリックがアンジェリーナに便りを出さなかったことは、のちにアンジェリーナじしんも認めるところである。第三幕第一場の、レジーナとの対話の場面を読むことにしよう。

「——レジーナ、話があるの。あたし、エリック・マックルアを愛していると思うの。とても悲しいわ。

——でも彼はあなたにラヴレターを書いたんだし……

——えっ、ラヴレターですって……だいいち、手紙なんかくれたこともないわ。

——なんですって? じゃあ、あなたがしてくれた話はどうなるの? 嘘だったの?

——嘘をついたわけじゃないわ。あたし自身信じこんでいたのよ、あの話を」(p.1064)。

このようにアンジェリーナは、エリックから手紙がきたことを否定している。では、彼女が食べたと言う手紙は誰によって作成されたのだろうか。もし手紙

が実際に書かれたのであれば、アンジェリーナ以外ではありえない。『モン・シネール』のエミリーが架空の発信人となって自分宛ての手紙を執筆したのと同じように、アンジェリーナもまた、愛されたいと願いながら、自分自身にたいして手紙をしたためたと解することができるのである。またこの手紙は己れの愛の感情を色濃くにじませているにちがいない。したがって、手紙を書き、食べるという行為は、『ヴァルーナ』第二部のマルグリットにとってと同様、アンジェリーナにとっても、完全に孤独な営為であり、告白の不可能性を証拠だてている。もっとも、この〈食べられた手紙〉をめぐるのは、別の解釈が可能であろう。手紙がほんとうに書かれたのではなく、ただ単に夢みられたにすぎないとする解釈である。エリックに愛されたいという願いが、エリックを愛する気持ちと重なりあって、アンジェリーナに愛の手紙を受け取ったように想像させたとも考えられるのである。〈夢みられた手紙〉は『漂流物』のエリアーナにおいても看取されたけれども、この手紙の意味するものは同じではないだろうか。ここでも、手紙は現実には発送されていないがゆえに、愛の対象とのへだたての中に生きるアンジェリーナの孤独性をひき立たせている。そして手紙を食べるという想像上の行為は、アンジェリーナの愛（の願い）のはげしさを認めさせると同時に、告白の不可能性をいっそう強調していると思われる。アンジェリーナとエリックとは結果的には愛しあうことになるので、二人の愛は交流をもたないとしても、さして悲劇的ではない。しかし、いずれにせよ、ここでの〈食べられた手紙〉が、先の〈ひき裂かれた手紙〉とともに、作中人物における孤独性と告白の不可能性とを明示していることは変わりがないのである。

（４）『モイラ』

発表された年代順にしたがえば、順番は前後するが、『モイラ』（1950）においても、発送（投函）されない手紙はみいだされる。この小説は、プロテスタントの熱烈な信仰をもつ学生ジョゼフを主人公とし、このジョゼフが混血の娘モイラを相手に肉体の罪をおかし、モイラを殺害するにいたるまでの、彼の内的な変遷過程をえがいている³²⁾。そして重要な手紙は、死の寸前にモイラが作成している。だがこの作品では、デア夫人、サイモンといった人物たちも手紙をしたためており、モイラの手紙を検討する前に、これらの人物たちの手紙に言及しておくことからはじめよう。

デア夫人の手紙は第一部第六章にみられる。金の無心をしてきた養女のモイラに宛てて、デア夫人は返事を書く。この手紙の中で、夫人はモイラの不品行

を責め、長らく面倒を見てきたことでの気苦労を打ち明ける。しかしこれは重い内容の便りなので、新たに、金を送ることを承諾したありきたりな手紙を作成し、最初の手紙のほうはひき裂く。それゆえ、デア夫人は発送（投函）しない手紙を執筆したことになる。手紙は、一つには、直接本人には言いにくいことがらを知らせることを目的としており、はじめの手紙もこの目的にそってしたためられた。だがそれを発送（投函）しないことによって、結局デア夫人は胸に秘めた思いを伝えるにはいたらない。デア夫人の発送されない手紙は、告白の不可能性とそれほど結びつかない。しかし内心の思いの伝達を放棄しているという点から、デア夫人の孤独性あるいは孤立性をほのめかしているのである。

サイモンの手紙は発送（投函）されない手紙には属さない。しかし、告白の困難さを感じとらせるという意味で注目に値する。ジョゼフと同じくデア夫人の下宿の住人であるサイモンは、ジョゼフを一瞥するや否や、たちどころに同性愛的な感情にとらえられ、ジョゼフに接近し、ジョゼフのそばに執拗に寄り添う。ジョゼフのほうは、サイモンの存在をうるさく思うだけで、サイモンにまったく友情をいだかない。それでもサイモンはジョゼフの友情を得ようとし、その一環として短い手紙を書く。第一部第九章で語られているように、ジョゼフが留守にしているあいだ、サイモンはジョゼフの部屋にしのみび込み、机の上に、白い木蓮の花とともに、「白きこと君にあたわず (Moins blanche que toi)」(p. 51) と書いた紙きれを置く。この行為はまずもってジョゼフの純粋さをたたえることを目指している。なぜなら〈白〉は汚れのない純潔さを象徴するからだ。だがこの行為は同時に愛の告白の価値を有するともうけとれる。サイモンは、ジョゼフにあこがれ、ジョゼフを崇拜・熱愛する人間が身近にいることを知らせたいのであろう。けれども、「白きこと君にあたわず」というメッセージは、内容的に言って、愛の全面的な告白だとはみなしがたい。しかもこのメッセージを盛りこんだ紙きれには、サイモンの名が記入されていない。この紙きれは、アンドリエヌ・ムジュラがモンフォールの駅のそばで作成した〈署名されない手紙〉の一種であると考えられる。もっとも、サイモンのふるまいは、ジョゼフに見破られ、ジョゼフの非難と憤慨の対象となる。しかし、この手紙が告白のためらい、ないし不可能性を浮かび上がらせていることは、まぎれもないのである。

また、この点に関連して、サイモンのその後の運命をたどっておくことは必要であろう。サイモンはジョゼフの冷淡さを目のあたりにして、自己の愛がまっ

たく不毛で希望のないものであることを決定的に悟ったとき、ジョゼフに愛を明確に告白することなく郷里の実家にもどる。そして銃器を操作しているうちに、自分を撃って絶命する。サイモンの死が事故によるのか、自らの意思にもとづくのか、作品では定かにされていない。とはいえ、不可能な愛の苦悩と絶望の果てに自殺したとみるのが妥当な解釈であろう。サイモンのこのような孤独な最期を視野に入れるならば、「白きこと君にあたわず」と書いた匿名の手紙は、告白のころみというよりも告白の挫折を刻印しているがゆえに、いっそう悲劇的ないろどりを帯びてくるのである。

では、モイラの手紙を分析することにしよう。モイラは主人公ジョゼフの欲望をそそる存在として、作品の後半、つまり第二部第十章において登場する。しかしジョゼフとモイラとの結びつきは作品冒頭から暗示されている。『モイラ』は、ジョゼフが大学に入学するため、デア夫人の下宿屋に到着したところからはじまっており、ジョゼフが住むことになる部屋が、以前はモイラの部屋であったことが、モイラの喫煙の習慣とともに、デア夫人の口をとおして知らされているのである³³⁾。また、第二部第二章において、女中ジェマイマは、モイラがベッドを部屋の真ん中に斜めに置いて寝ていたことをジョゼフに伝えつつ、「きれいな方ですよ、モイラお嬢さまは。ただお嬢さまにはお考えがおりなのです。それにほかのこともありますし…」(p. 97)と言っている。このほめめかしは、デア夫人が教えた喫煙の習慣と相俟って、モイラが放縦な女であるという印象をジョゼフにうえつけている。と同時に、まだ見ぬモイラへの欲望をジョゼフのうちにひきおこしている。第二部第六章で述べられているように、ジョゼフは、モイラがかつてそうしていたのと同じように、ベッドを部屋の中央に、斜めに置き、そしてそのベッドに身を投げるのである。この行為は、ベッドをモイラの代替物にしたものであり、モイラへの肉体的欲望を顕在化させている。このようなことがあって、ジョゼフは、牧師志望の友人デーヴィッドが居るファーガンスン夫人の下宿にかわる。ところが、ジョゼフは前の下宿にセーターを忘れてきたことに気づき、忘れ物を取りにデア夫人のところに行く。その折、すでに帰郷しているモイラと出会うことになるのである。

第二部第十章における出会いの場面で、二つのことが注目される。その第一は、モイラが放縦な女であるという印象をジョゼフが深めているという点である。モイラは口紅を塗りたくった赤い唇をしているし、おまけに赤い服を着ている。唇と衣服の〈赤〉の色彩は、モイラの肉体性・官能性を象徴するものとして、ジョゼフの記憶に焼きつくことになる。また、二人の出会いは、ジョゼ

フが使っていた部屋、すなわち、もともとモイラのものである部屋でおこなわれるのであるが、モイラはベッドの上に「肌色の靴下とピンク色をしたネグリジェ」(p. 122)を放り出している。さらにモイラはリラの香水の「おそろしく心地よくて人を酔わせるような匂い」(p. 122)を漂わせている。これらの下着類やリラの香水の匂いもまた、ジョゼフの欲望を刺激している。このように、ジョゼフは出会いの場面で、モイラの肉体性・官能性を強く意識しており、第二部第十三章で、キルグルー³⁴⁾から、「あの女 [モイラ] は、もしゴリラが言い寄ることがあるとすれば、ゴリラにだって身をまかすだろうさ。(…) あれは、ラテン人たちがルーパと呼んだもの、つまり牝狼だよ。絶えず飢えたけだものなんだ」(p. 136)と聞かされるにおよんで、モイラが放縦な女であるという決定的な確信をもつにいたる。そして肉の化身であるモイラに反撥しつつも、モイラへの欲望にますますとりつかれるようになるのである。

二人の出会いの場面で注意をはらうべき二番目の点は、モイラがジョゼフに並々ならぬ興味をいだいているという事実である。モイラは、デア夫人からの手紙によって、自分の部屋を赤毛の学生が占有していたことを知らされている³⁵⁾。赤毛の学生とはジョゼフのことであるが、モイラはジョゼフを見た途端、このように言っている。

「あなたなのね、赤毛の学生って！(…)あたしの部屋を赤毛の学生が使っているという手紙をもらったけどどうまく言ったものだわ(…)。でもこれほどまでに赤毛だとは思っていなかったわ。さあ、あたしの顔を正面からみてごらんなさいよ！」(II-10, p. 122)。

モイラは、ジョゼフが赤毛であるということで、ジョゼフの容貌に大きな関心を寄せている。この関心は、「さあ、あたしの顔を正面からみてごらんなさいよ」(Regardez-moi donc en face!)という言葉からはっきりと読みとれる。モイラは、ジョゼフが部屋を立ち去る間際、忘れ物のセーターを床に投げつけて、ジョゼフにひろわせるときにも、「あたしの顔をみてごらんなさいよ」(Regardez-moi, p. 123)という要望を繰り返している。それからジョゼフの顔の魅力に眩惑されたことを悟られないために、「あなたって」と切り出したあと、二、三秒の間隔を置いて、「おかしな顔をしているわね」と言いつぎ、体面をとりつくろうのである (p. 123)。

ジョゼフにたいするモイラの関心は、ジョゼフが宗教的人間であることでいっそう深まる。この関心がこうじて、モイラは学生たちのたくらんだ陰謀に加担することになる。ジョゼフのことを快く思わない学生たちは、ジョゼフの

信仰を笑いものにするため、モイラにジョゼフを誘惑させることを計画する。モイラはこの計画に同調し、第二部第二十一章に叙述されているように、ジョゼフの部屋に闖入する。そのあとジョゼフが部屋にもどってくると、部屋に鍵をかけ、鍵をドレスの胸の奥にしまいこみ、ジョゼフと対峙する。ジョゼフはモイラへの欲望に屈するまいとして、モイラを徹底的に無視・黙殺しようとする。モイラのほうは、ジョゼフを誘惑するためにやってきたのに、ジョゼフの純粹さに接してしだいにジョゼフに心をひかれ、ついにジョゼフを愛するにいたる。暇つぶしのため、友だちのセリナに宛てて書いた手紙のなかで、モイラはこう明言している。

「あたしはあなたたちみんなが考えているような汚れた女の子じゃないのよ。
楽しむための機械であることはもうたくさんだわ。(…)

負けたわ、セリナ。あたしのほうこそ恋しているのよ」(p.169)。

モイラは過去の自堕落な生活を反省するとともに、ジョゼフへの愛を確認している。ところで、ここで重要なことは、モイラが自らの愛を、その対象であるジョゼフ本人にではなく、友だちのセリナに、しかも手紙で打ち明けているという点である。ジョゼフが目のまえにいるにもかかわらず、モイラは第三者への手紙というかたちでしか、自分の思いを語りえないのである。たしかに、ここでの手紙は自己理解への貢献という積極的な役割を果たしているかもしれない。しかし、秘められた感情の伝達の困難さを察知させていることもまたたしかなのだ。もしモイラが直接ジョゼフに胸の内を明かしていたら、このあと述べるような悲劇的な結末は避けられたかもしれない。セリナ宛ての手紙は、告白がモイラにおいてもまた不可能なものとしてあることをまずもって映し出しているのである。

その後の物語の展開にふれておきたい。ジョゼフへの愛を自覚したモイラは、ジョゼフを誘惑するという当初の計画を放棄し、部屋を出て行こうとする。だがモイラは、胸の奥にしまっておいた鍵を床の上にすべり落とす。ジョゼフが鍵をひろう。その際、モイラは戯れにジョゼフの髪にさわる。このことがきっかけとなって、ジョゼフは欲望の人間に変身する。ジョゼフは、「いやよ (Je ne veux pas!)」(p.173) と繰り返して言うモイラにおそいかかり、モイラと性の交わりを結ぶ。さらには、肉体の誘惑に負けたことを恥じて、怒りと絶望のなかでモイラを絞め殺してしまう。このあと、ジョゼフはモイラの亡骸を庭に埋め、犯罪をかくそうとする。けれども、モイラがもどってこないことを心配したセリナは警察に通報し、捜査がおこなわれる。こうした中で、ジョゼ

フは逃亡するのを断念し、自首することを決意する。作品は、ジョゼフが警察に向かうところで終わっている。

モイラがセリナに宛てて書いた手紙に話をもどそう。いったいこの手紙はどうなったのであろうか。手紙はモイラの死後、ジョゼフが保有し、セリナの手には渡らない。ジョゼフが警察に自首しに行くところを物語った、作品のさいごの頁には、次のような記述がみいだされる。

「(…)突然、彼 [ジョゼフ] はモイラの手紙のことを思い出した。彼は外套をひらき、片方の手袋をぬいだ。手紙は依然として上着のポケットの中にあった。もしその気になれば、手紙をひき裂くことも、近くのポストに放りこむこともできるのだ。立ちどまって考え、彼は手紙を、それがあつた処にそのまましておくことに決めた。彼の知らない、しかし彼の運命の一部をかたちづくる^{ことづて}伝言の書かれた手紙を」(Ⅱ-25, p. 193)。

一読して明らかなように、モイラの手紙は発送されない。ジョゼフが上着のポケットの中にそのまましておくことで、この手紙は、少なくとも作品においては、いわば闇に葬り去られるのだ。こうして生前のモイラの愛は、ジョゼフにも、セリナにも、ほかの誰にも知られず、さいごまで秘密にとどまる。モイラの愛は徹頭徹尾、孤独な愛なのである。投函されなかったこの手紙は、告白の不可能性ととも、モイラの孤独性をも露呈している。しかもこの孤独性はモイラが、自分の愛した当の相手に殺されるだけに、いっそう悲劇的である。モイラの手紙は、デア夫人やサイモンの手紙とくらべて、書き手の孤独性をはるかに深刻なかたちでうかがわせているのである。

(5) 『他者』

発送(投函)されない手紙は『他者』(1971)の中にも存在する。この小説で問題の手紙を書くのは、1949年のカーリンであるが、まず作品の構成と概要を簡単に紹介しておきたい。『他者』は四部に分かれ、第一部は「1949年4月21日」と題され、カーリンの溺死体がコペンハーゲンの港で発見されたことを語っている。第四部は「1949年4月20日」で、第一部の日付の前夜にカーリンが二人のならず者たちに追いかけられ、海に落ちるありさまをえがいている。第一部と第四部は三人称で書かれ、プロローグ・エピローグの役割を果たしている。作品の大部分の頁を占めるのは、一人称で語られた第二部の「ロジェの物語」と第三部の「カーリンの物語」であり、作品は実質的にはこの二つの部分から成り立っている。

第二部では、ロジェが1939年におけるカーリンとの出会いを回想している。

フランス人のロジェは、戦争の勃発がしきりに噂される祖国をはなれて、コペンハーゲンへ休暇でやってくる。ロジェは戦争への恐れと死へのおののきから逃れるために、肉体的な快楽を追いもとめる。しかしながら、ロジェはデンマーク語ができないために孤立し、そして孤立の中で欲望の苦しみをあじわう。こうした中で、ロジェは、フランス語を話せるカーリンと偶然街なかで出会い、親しくなり、やがて愛の情熱に支配される。けれどもカーリンはプロテスタントの敬虔な信仰をもっており、この信仰が愛の成就をさまたげる。とはいえ、カーリンは肉体的なものにも魅せられていて、結局、宗教と訣別することによってロジェにからだをゆだねる。二人ははげしい抱擁のなかで時をすごす。しかし独ソ不可侵条約が締結されて戦争が不可避になったとき、ロジェは別離の悲哀にたえながら帰国の途につく。

第三部においては、カーリンが十年後のロジェとの再会の模様を物語っている。1949年のカーリンが置かれた状況をまず説明しておこう。カーリンは第二次世界大戦中、コペンハーゲンのまちを占領したドイツ軍の将校たちを相手に遊び戯れ、放縦のかぎりをつくした。このため、世間の人びとは終戦後、カーリンを法廷で裁くかわりに、彼女の存在を無視するという罰を課した。

「わたしは好きなように外出することができる(…)。誰もわたしを見張りはしない。だが誰もわたしを見ないのだ。まるでわたしなど存在しないかのように。まちは取り憑かれている。亡霊に取り憑かれている。その亡霊とはわたしなのだ。(…)郵便配達人はわたしを見ない。肉屋の小僧はわたしを見ない。女たちも男たちも、誰も」(Ⅲ, p. 816)。

このように完璧な孤立状況にあるとき、ロジェがコペンハーゲンにやってくる。ロジェは1939年には無神論者であった。しかし戦後まもなくカトリックに回心し、いまは修道院に入るつもりをしている。ロジェの今回の旅の目的は、十年前カーリンを誘惑して信仰をうしなわせたことへの許しを乞うことにある。そしてカーリンに信仰を回復してもらいたいと切願している。ロジェはカーリンの家を幾度か訪ねる。ところがカーリンはかつての愛の抱擁をひたすら望むので、二人の対面は宗教と愛、信仰と欲望との葛藤の場面となる。この葛藤のなかで、カーリンの愛の願いが一瞬勝ちを制し、二人は肉体の交わりを結ぶ。けれども、このあとロジェはコペンハーゲン在住の司祭の住所を書きしるした紙きれをのこして、永久にカーリンのもとを去る。カーリンはふたたび別離の辛酸をなめ、深い孤独におちいる。

第二部と第三部の物語内容を要約してきた。この要約によって、『他者』が

一組の男女の出会いと別れの物語であること、語り手の愛に対峙するかたちで、語り手によって愛される者の信仰が置かれているがゆえに、愛と宗教との関係が真正面から問われていることがわかる。つまりこの小説では、愛が信仰とどのようにかわるかが、重要な問題点であり、この点に関連して、とくに1949年の、ロジェの出発後のカーリンの信仰的態度をしらべることが、是非とも必要な課題になってくる。しかしこの問題・課題については、以前仔細に検討したことがあり³⁶⁾、それに本稿の趣旨からもはずれるので、ここでは手紙のことだけをあつかいたい。この作品においては、事務的なものをのぞいた注目すべき手紙は、1949年のカーリンによって作成されている。カーリンはまず、ロジェの最初の訪問をうけたあと手紙をしたためる。

「ロジェが出て行くや否や、彼に手紙を書こうという考えが浮かんだ。燃えるような、たくさんのことを盛りこんだ愛の手紙を。名宛人に送るつもりがまったくなかっただけに、わたしはその手紙を思いきり大胆に書いた。ただしそうやって、いくつかの妄想を追い払いたかった。それに、口にすることができない或る種の文句を、白い紙のうへの黒い文字としてみることは、わたしに奇妙なよろこびを与えた。こんなふうにしてわたしは自分を解き放っていたのだ」(Ⅲ, pp. 836-837)。

カーリンは手紙を執筆することでよろこびをいただき、解放感をあじわっている。ちょうどアドリエンヌ・ムジュラがモンフォールの宿屋の食堂ではじめて便りを書いたときと同じように³⁷⁾。しかもカーリンにおいては、書くことで「いくつかの妄想を追い払」うことが目指されている。この「妄想」(obsessions)とは、次に「口にすることができない或る種の文句」と言われていることから、カーリンの愛の願い、あるいは肉体的欲求にまつわるものであろう。かくして手紙を作成することは、カーリンにとって、第三部の物語＝手記を書くことと同様に、おそらくカタルシスの価値を有している。しかしながら、こうした積極的な意義を認めつつも、ここでも手紙が発送(投函)されないことはやはり銘記しておかなければならない。この手紙はカーリンの肉体的な欲望を表白している。けれども、もともとロジェとの交流をもちたいという願いにうながされてしたためられたはずであるのだから、ロジェのもとにとどかなければ、本来の使命を果たしているとはいえないのではないだろうか。なるほど、「名宛人に送るつもりがまったくなかっただけに、わたしはその手紙を思いきり大胆に書いた」とカーリンは言っている。しかし、いかに大胆に、自由奔放に書くことができるとしても、発送しない手紙を作成することは自慰的な行為に近い。

したがって、ここでの手紙は一時的なよろこびや解放感をもたらしているとはいえ、発送されないがゆえに、内心に秘めた思いを伝え得ないカーリンの孤独性を露見させているのである。

カーリンはふたたび手紙を書くことになる。すでに述べたように、ロジェはカーリンに信仰をとりもどしてほしいと願って、フランスからやってきた。だが、カーリンとの会見を重ねるうちに、それが困難であることがわかって、コペンハーゲンを立ち去る決意をする。ロジェはカーリンへの訪問をこれできれいにしようと思った日³⁸⁾、カーリンと一緒にひざまずいて祈ることを提案する。しかしカーリンが拒否したため、ひとりで祈りをとнаえて帰っていかうとする。その折、カーリンはロジェともう会えなくなることに堪えかねて、「ロジェ、(…)また来てくれないのなら、わたし、自殺するわ」(Ⅲ, p. 883)と口ばしる。この瞬間から、カーリンは死に魅せられる。ある夜、ロジェがコペンハーゲンを出発するはずの日の夜、港で一人の女性が溺死し、その女性の遺体がはこばれていくのを、カーリンは自宅の窓から目撃する。カーリンは、その女性が自分の身がわりとなって自殺したのだと考え、より良き人生の可能性をもとめてロジェに便りを書くこととする。このくだりを引用することにしよう。

「奇妙な考えがわたしをとらえたのは、ベッドのなかでだった。議論の余地のない命令に服従するみたいに、その考えにしたがった。そのすぐあと、わたしは机のまえ、明かりをつけた電灯のそばに腰かけ、一通の手紙を書きはじめていた。その手紙は、わたしが住所を知らないの、名宛人にはけっしてとどかないはずであったが。「ロジェ、あなたに手紙を書くことで、あなたを身近に取りもどせるような気がします。わたしはあなたの存在なしにはうまく生きていけません。わたしはあなたを愛しています。そして苦しんでいます。あなたともう一度会えたら死ぬかもしれません。でもわたしは、そのようにして死にたいのです。よろこびのために死にたいのです」。

(…)

彼がけっして読むことはないのに、こうしたことがらを書いたところでなんの役に立つのだろうか？

手紙をくずかごに投げ捨てて、わたしは服を脱ぎはじめた」(Ⅲ, pp. 898-899)。

カーリンはこの手紙のなかで、ロジェへの愛の思いを十全に表出している。愛する感情、再会への願い、ロジェの存在を必要とする気持ちが切々と綴られている。内容的にみて、この手紙は、ロジェに打ち明けたいことがらをありのままに文章化している。だが、不運なことに、カーリンはロジェの住所を知ら

ないため³⁹⁾、この手紙もまた発送（投函）されず、くずかごに捨てられる。もし宛先を知っておれば、カーリンはこの手紙を投函しただろうと推測される。それゆえ、ここでは告白のためらいを云々することはできない。しかし告白がカーリンにおいてもまた、不可能なものとしてあることは疑いをいれない。それにこの手紙は、いかにカーリンの心情を吐露しているとしても、発送されないためになんの役にも立たない。「彼がけっして読むことはないのに、こうしたことがらを書いたところでなんの役に立つのだろうか？」とカーリンも自問しているように、発送しない手紙を書くことは、結局は孤独の苦悩をいやますだけのむなしい行為なのだ。最初の手紙と同様に、この手紙も、告白の不可能性ととともに、ロジェとのへだての中で生きることでのカーリンの孤独性を目立たせているのである。

以上のように、私たちはこの章で、五つの作品における手紙をしらべてきた。この中には、架空の発信人・受信人を設定した手紙や食べられた手紙やひき裂かれた手紙や夢見られた手紙があるが、サイモンの署名されない手紙を別にすれば、これらはすべて発送（投函）されない手紙に包括することができる。そしてこれらの発送（投函）されない手紙は、今までの検討によって明らかになったように、概して、作中人物の孤独性と告白の不可能性とを端的に示す指標となっており、グリーン作品において、他者との交流をなしえず、他者から隔絶された孤独者の世界を構築することに深く関与しているのである。

註

19) 目次の1.2.に該当する部分は、『ジュリアン・グリーンにおける手紙について(1)』、山口大学「文学会志」第43巻、1992、pp.133-149を参照。

なお、今回取りあげる *Mont-Cinère* は、*Julien Green, Œuvres complètes, Bibliothèque de la Pléiade*, Gallimard の t. I に、*Varouna* は t. II に、*Sud, Moïra, L'Autre* は t. III にそれぞれ収録されている。

20) 『モン・シネール』は全体として42の章から成り立っている。

21) Jacques Petit: 《Notes》 pour *Mont-Cinère*, in *Julien Green, Œuvres complètes, Bibliothèque de la Pléiade*, Gallimard, t. I, p.1103.

22) フランクは、死んだ最初の妻とのあいだにできた娘ローラを連れてきたりして、我が物顔にふるまうのである。

23) 『ヴァルナーナ』は全体としては輪廻転生を大きな主題としていて、独立した物

- 語としても読むことができる三つの部分から成り立っている。すなわち、第一部の「ホエル」、第二部の「エレヌ」、第三部の「ジャンヌ」である。
- 24) 魔術師ウスターシュ・クロシュは、娘エレヌに催眠術をかけ、妻エレヌの再来としてベルトラン・ロンバルの前に登場させるのである。
 - 25) ベルトラン・ロンバルにたいする思いを文章表現することを指している。
 - 26) Jacques Petit: 《Notes》 pour Varouna, in Julien Green, *Œuvres complètes*, Bibliothèque de la Pléiade, Gallimard, t. II, p. 1510.
 - 27) したがって、『漂流物』におけるエリアーヌの愛の物語と同じように、マルグリットの愛の物語は劇的な展開をみせない。
 - 28) 厳密に言えば、サウス・カロライナ州チャールストン郊外にある大農場の居間(salon)を舞台にしている。
 - 29) 言いかえれば、エリックは、死が待ちかまえているため、自分の気持ちを制禦しようとするのである。
 - 30) 頁数の前の数字Ⅲ-1は、ここでは劇作品が問題になっているので、第三幕第一場のことである。
 - 31) エドワード・プロデリックの姪にあたる人物で、孤児となって以来、おじの家に身をよせている。
 - 32) 『モイラ』については、以前詳しく論じたことがあった。『ジョゼフを取りまく人物たち(1)(2) —ジュリアン・グリーンの『モイラ』について—』(山口大学「文学会志」第39巻, 1988, pp. 51-71; 山口大学「独仏文学」第11号, 1989, pp. 103-124), 『『モイラ』の再読のころみ(1)(2)(3)(4)』(同「文学会志」第40巻, 1989, pp. 159-176; 同「独仏文学」第12号, 1990, pp. 33-56; 「文学会志」第41巻, 1990, pp. 73-90; 「独仏文学」第13号, 1991, pp. 67-87), および『『モイラ』の中の秘められた物語(1)(2)』(「文学会志」第42巻, 1991, pp. 87-102; 「独仏文学」第14号, 1992, pp. 19-34)を参照。
 - 33) ジョゼフを部屋に案内したデア夫人は、「まあ、モイラったら、シガレットケースを置き忘れてるわ」(I-1, p. 6)と叫んでいる。
 - 34) サイモンと同郷の、ラテン語の復習教師で、ジョゼフに少なからぬ関心をいだいている。
 - 35) デア夫人は、モイラに発送した手紙の追伸で、「おまえの部屋には赤毛の学生さんがはいていますから、クリスマスの休暇まえには帰らないこと」(I-6, p. 30)と書いている。
 - 36) 拙稿『ジュリアン・グリーンと〈他者〉の問題 —L'Autre 読解のころみ—』, 京都大学フランス語学フランス文学研究室発行「仏文研究」第5号, 1978, pp. 141-180を参照。
 - 37) 拙稿『ジュリアン・グリーン作品における手紙について(1)』の2.(2), p. 144を参照。
 - 38) 実際にはロジェはもう一度だけカーリンのところにもどってくる。港で自殺し

た女性の遺体が発見された日の夜、すなわち、カーリンが二通目の手紙を書いた夜、突然やってきて、混乱状態のなかでカーリンと肉の交わりを結ぶ。

39) コペンハーゲンに滞在するロジェは、自分のホテルの住所をカーリンに教えないのである。